下田遺跡

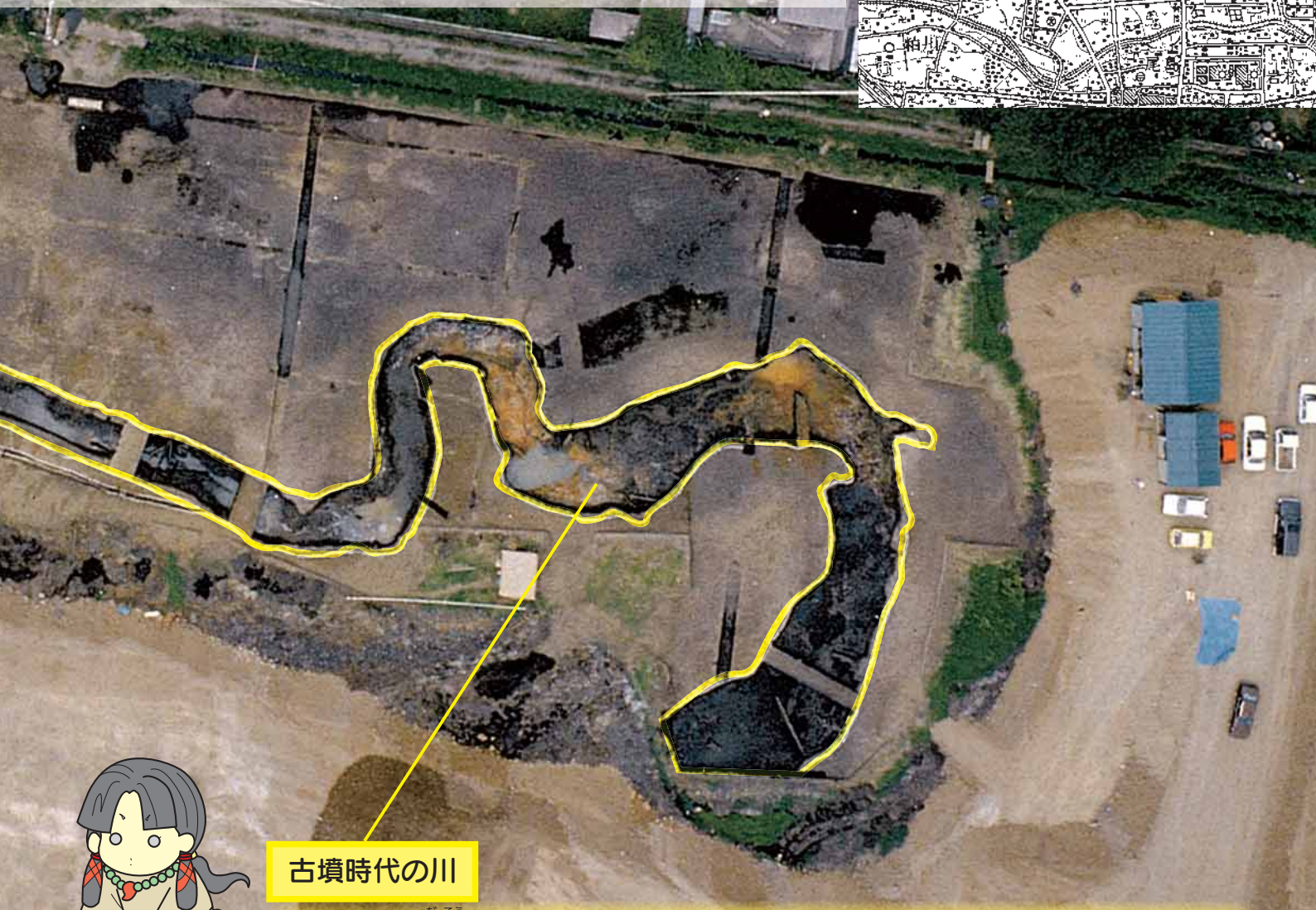
ー水辺に暮らした縄文人ー

下田遺跡は、太田市新田
古墳時代の川を調査しま
古墳時代の川の調査が終
量に出土しました。この
4,000年～3,500年前）の
どが出土しています。木
下田遺跡では、水の中で真
ちが普通見ることのできな
馬県指定重要文化財に指定

縄文時代の川

土の色が変化しているところが約3,000年前の縄文時代の川です。この川は、最も広い部分で23m、深さは1.5mありました。この中から流木や縄文土器、石器と共に縄文時代の木製品や木の実が多量に出土しました。通常、縄文時代の木製品は腐ってしまい残っていませんが、下田遺跡では、腐食して炭のようになった土によって真空パックされていたため、木製品や木の実が当時のままの姿で出土しました。まさに、縄文時代のタイムカプセルといえます。

木崎町に立地しています。平成２年に、工場を建設するため、南北に蛇行して走るた。この中からは約1,500年前の木製品などが出土しています。
わった後、土の色が変化しているところを掘ってみたところ、縄文時代の土器が多部分を広げると、調査前には全く予想できなかった縄文時代中期～後期（今から約川が出現しました。この中からは、漆器や石斧の柄などの様々な木製品や木の実な製品は普通腐ってしまうため、3,000年以上も前のものが残ることはありませんが、空パックされていたため、当時のままの状態で残されていました。このため、私たい縄文人の食べ物や道具が実際に出土したのです。これらの多くは、平成17年に群されています。



古墳時代の川

南北方向に蛇行しながら走る川を200m以上調査しました。この中から、当時のはしご、馬の鞍、鋤、船などの様々な木製品が出土しました。また、水の流れを止めるための堰の跡も発見され、この川が古墳時代中期（約1,500年前）に用水路として使われていたことがわかりました。

② 堰

③ はしご

水辺の縄文人

下田縄文人の暮らし

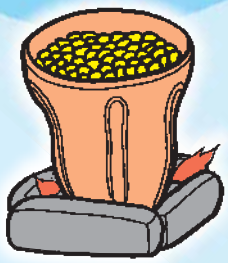
縄文時代の人々は、普通、台地の上に竪穴住居を造り、そこで暮らしていたと考えられています。ところが、下田遺跡では、水が湧いてくるような川の周辺で、縄文人が生活をしていた様子がわかりました。川の中からは、縄文土器のほかに縄文人の食べ物であった木の実が多量に出土し、この周辺では土の中に打たれた杭や蒸し焼き料理の跡が見つかっています。

川の底に打たれていた杭
杭が楕円形に打ち込まれていました。下の部分しか残っていませんでしたが、右の絵のように杭の回りを板で囲んだ中にトチの実を入れて水にさらし、アク抜きをしたと考えられます。

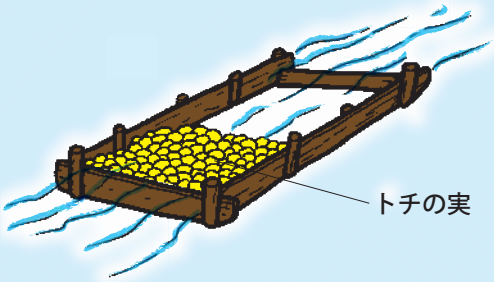
トチの実のアク抜き

トチの実のアク抜きは次の工程で行われます。
①皮を向いたトチの実を灰を入れた水と煮る
②流れる水にさらしてアクを抜く
これを何度も繰り返すことによって、ようやく食べることができるようになります。トチは縄文人の主食として重要な食材であっただけでなく、冬の間の保存食としても重宝されていました。

下田遺跡で発見された杭の列は、トチの実を水にさらしていた場所と考えられ、この川はトチの実のアク抜きの場として利用されていたと考えられます。



灰と一緒に煮出す



流水にさらす

縄文時代の川

縄文人の食べ物

最も多く出土した木の実はトチの実とクルミで、このほかにコナラの実やブドウの種も出土しています。クルミはそのまま食べることができますが、トチの実は大変アクが強いため、アク抜きをしなければ食べることができません。

出土したトチの実

下田遺跡で最も多く出土した木の実です。このままではアクが強く食べられませんが、アク抜きをすることによって、主食としてだけでなく、冬の保存食として大変有効な食物です。

出土したクルミ

クルミはトチの実と違い、殻を割っただけで食べることができます。

出土した磨石

磨石は、木の実を割ったり、つぶしたりするための道具です。まとまって出土したことから、ここで木の実をつぶす作業をしていたと考えられます。

集石遺構

熱した石の上に食物を置き、この上に土をかけて、蒸し焼きにした場所です。

縄文時代中期（約4,000年前）の土器

左の２点が浅鉢形土器で、右の３点が深鉢形土器です。深鉢形土器は煮炊きに使ったため、煤が付着して黒くなっています。

縄文時代後期（約3,500年前）の土器

５点とも深鉢形土器です。煮炊きに使ったため、煤が付いて黒くなっています。右の2点のように飾られた土器も煮炊きに使われたことがわかります。

下田遺跡と漆

漆器

下田遺跡では、４点の漆器が出土したほか、漆によって模様が描かれた土器が多く出土しています。漆器は木を加工した上に漆を塗った木胎漆器と篭に漆を塗った藍胎漆器が出土しています。漆は容器や土器を飾るだけでなく、液体が漏れるのを防ぐ役割を持っています。また、接着剤として漆を使った土器が出土したことから、下田遺跡の人々が漆を日常的に使いこなしていた様子をうかがうことができます。

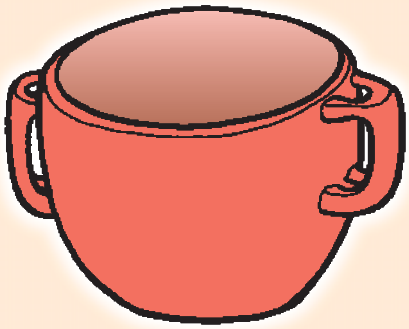
片口付き烏帽子型漆器（縄文時代後期）

片側に注ぎ口が付いた漆器です。残っている部分は縦・横ともに16㎝です。木を16㎝の深さに削り、内外面に漆を塗っています。内面には生漆を塗り、外面には生漆を塗った上にベンガラと混ぜた漆を塗って赤い色を出しています。上の部分を欠いていますが、右の絵は新潟県の分谷地Ａ遺跡の漆器を参考に推定復元しました。

把手付き漆器

（縄文時代中期）

大きなＸの形をした把手が左右に付く、鉢形の漆器です。1/2が残っており、残っている大きさは27㎝です。内外面にベンガラと混ぜた漆を塗っています。１本の木を削り出して作っており、縄文人の工芸技術の高さをうかがうことができます。

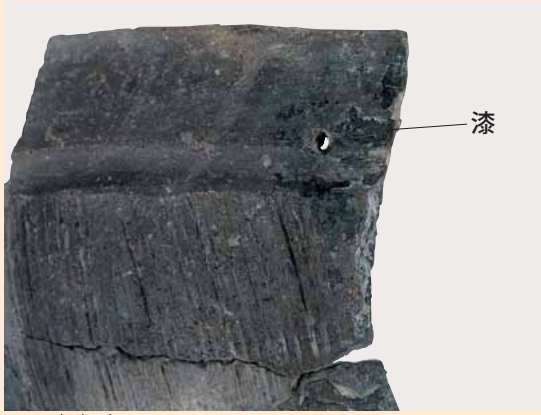


藍胎漆器

小さな篭に漆が塗られています。ほかの漆器と異なり、漆と朱を混ぜて塗っています。大きさは６㎜程度の小さな破片ですが、朱を使用した漆器としては現在のところ国内最古の漆器です。

底に生漆が付いた土器

土器の底の部分を、漆を塗るパレットとして使っています。



漆で接着された土器

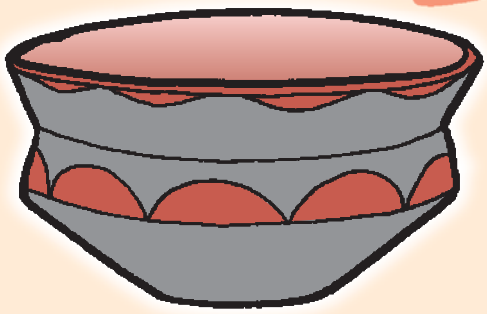
割れた土器に穴をあけ、縄を通してつないでいます。漆が接着剤に使われています。

赤と黒で彩られた土器

下田遺跡では、漆によっていろいろな模様が描かれた土器が出土しています。これも真空パックされ、空気に触れなかったためと考えられます。赤い色は漆とベンガラを混ぜて塗り、黒い色は漆をそのまま（生漆）塗っています。赤と黒の両方が塗り分けられた土器もありました。色が塗られた土器の種類は、浅鉢と有孔鍔付き土器です。浅鉢は食べ物を盛ったり、貯えたりした土器で、有孔鍔付き土器はお酒を造った土器かあるいは太鼓として使われたと考えられています。なお、煮炊きに使う深鉢には漆は全く塗られていませんでした。

浅鉢形土器　表には半円形の模様、裏には半円形と線が描かれています。

浅鉢形土器　表に半円形の模様が描かれています



浅鉢形土器復元図

有孔鍔付き土器の破片

土器全体が生漆で黒く彩られ、文様の上だけが赤く塗られています

有孔鍔付き土器の復元図

渦巻きの模様が描かれた土器

赤く彩られた土器の破片

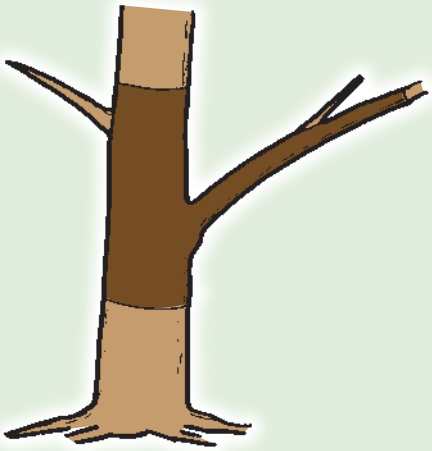
円が二重に描かれた模様や線を引いた模様があります

木の道具

縄文人が石器と木の道具を使ったことはわかっていますが、木の道具は普通の集落遺跡ではほとんど出土しないため、石器を研究することによって当時の道具を推定しています。下田遺跡では、石斧を付ける柄や土を掘るために使ったと考えられる道具などが出土し、実際にどのような道具を使っていたのかを知ることができます。

石斧の柄

木の幹と枝が膝のようになるところを利用し、幹の部分を加工しています。長さは78㎝あります。この先に石斧を付け、木を切る道具として使われたと考えられます。



石斧の柄のとり方

櫂状木製品

舟をこぐ櫂の形をした木製品です。左の二つは、先が欠けていますが、長さは90㎝あります。土を掘る道具として使われたと考えられます。右の木製品は未完成ですが、舟をこぐ櫂であったと考えられます。

下田遺跡の調査では、縄文人が水を利用して生活していたことがわかりました。自然と共に生きた縄文人の暮らしは、私たちに水や自然の大切さを教えてくれました。

太田市教育委員会　文化財課
〒370-0495　群馬県太田市粕川町 520
TEL.0276-20-7090　FAX.0276-52-6080
印刷　平成 22 年３月